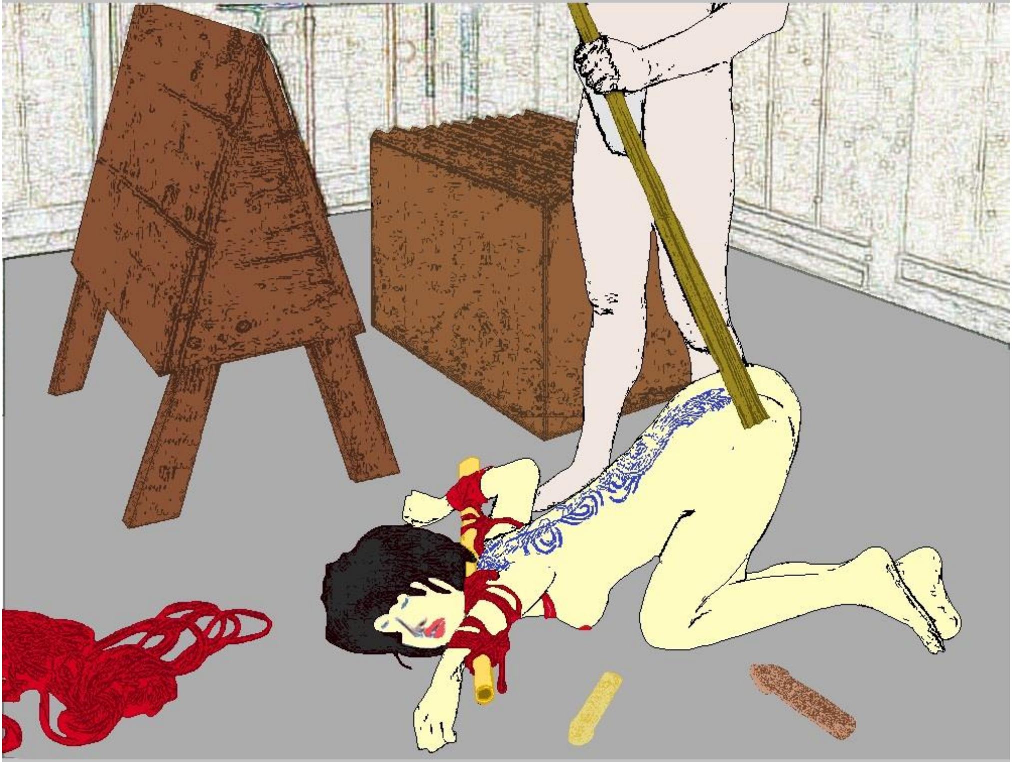
濡　墨

女賊と同じ入墨を背負わされ
濡衣を着せられた悪徳商人の娘



濠門長恭

目次

第一幕　破れ寺……四
第一場　拐わかし……四
三穴姦……五
蝶乱舞……二三
第二場　全裸捕縛……四九
裸縄掛……五一
刺青晒……五九
第二幕　女囚牢
第一場　吟味前夜
素肌検
牢問答
第二場　苛烈牢問
裸敲問
石抱問
廻舞台　若侍雄雌逝
蔓仕置
海老責
弓張棒（承前）
吊敲責
廻舞台　新妓夢現責
駿河問

第三場　虚偽自白
　父母流罪
　磔刑申渡
廻舞台　熟娘揺木馬
第三幕　拷問蔵
　第一場　盗金所在
　　毛粧焼
　　木馬責
　　股裂紐（承前）
　　逆吊責
　　水樽責（承前）
　　蜈蚣責
　　女貝干（承前）
　　強合歓
　　男牢入
　　大麻問
　　釘打責（承前）
　　首吊責
　第二場　濡衣問答
最終幕　処刑場
後書き

第一幕　破れ寺

貫目屋喜平。丁稚奉公から頭角を現わし、ついには先代に見込まれて婿養子となり、両替商に飽き足らず、商家への旬日凌ぎの銀子を融通して店（たな）を数層倍にも広げ、武家への用立てから国主にまで取り入って苗字帯刀を許され、貫目喜左衛門を名乗るに至る。

彼の目下の悩みは、ひとり娘の千代を娶（めあわ）す相手というよりも後継者であった。まず第一に、彼の眼鏡に適う商才を持った男がいない。そして、喜平の評判はよろしくない。

百人に一両ずつ貸しても取り立てに手間取り貸し倒れも出る。それよりは、担保を取れる一人に百両を貸すに如くはない。庶民相手の高利貸しは営まず、近隣の寄合や祭への寄進は欠かさないのだから、後ろ指を差されることもない。しかし、飼い慣らしたも同然の役人を後ろ盾の苛斂誅求きわまりない取り立てに遭った暖簾持ちからは、蛇蝎のごとく嫌われている。

明けて寛政五年の春。千代は十九となった。鬼も十八、番茶も出花を過ぎて。明年には年増と呼ばれる歳になる。

第一場　拐わかし

千代は放れの部屋でひとり、絵草紙を広げて熱心に読みふけっていた。裸の男の上に女が向

かい合って跨った図の横には時雨茶臼と記され、媾合い方についての微に入り細を穿った説明が記されている。千代の両手は行儀よく絵草子の端を押さえているが、なにやら膝をもぞもぞと擦り合わせている。

十九ともなれば、いや十六七の頃から、千代はこの類の絵草子を読み漁っている。だから、道端にたむろしている人足たちの卑猥な雑談も、その意味が分かるようになっていた。いわゆる耳年増目年増であった。

ぱしん。障子を突き破って、小さな白い塊が外から投げ込まれた。

千代は立って、それを拾い上げた。小石に包まれた投げ文だった。

ちよさま
おまえさまにあいたい
さるのこく　せいあんじ　まきごや
かしほんや　とめきち

千代は急いで障子を開けたが、裏庭に人影はなかった。振り返って、誰にも見られていなかったと確かめてから、千代は丁寧に紙片の皺を伸ばし小さく折りたたんで袂に入れた。頬が上気していた。

留吉は、千代に滑稽本や色草紙を手引きした貸本屋だが、二十五の優男で、千代が一方的に熱を上げている。これまでは秋波を送ろうとしなを作ろうとお得意様としか振り返ってくれなかった男からの付文である。色恋の知識はあっても初心な娘が舞い上がったのも当然だった。

その日の申の刻。千代は家を脱け出して、無鉄砲にも供をひとりも伴わずに静安寺を訪れた。住職は十年も前に身罷り、今はぽつぽつと無縁仏の供養塚しか残っていない廃寺にも、臆するところはない。むしろ、人目を忍ぶ恋路にお誂え向きと浮かれてさえいた。

裏手へ回ると、今にも崩れ落ちそうな小屋があった。板戸が一尺ばかり意味ありげに開いている。

「留吉さん……」

千代は板戸の隙間に身を滑り込ませた。

刹那。後ろから抱きつかれて両腕を押さえられ口をふさがれた。

「むうう……うう」

逃れようと身をもがいたが、すでに気は動転している。手足をじたばたさせるだけで、がっちり抑え込まれたまま、振り解けない。

「騒ぐんじゃねえぞ」

薄闇にぎらりと光る刃物を突き付けられて、千代は身を竦ませるばかり。帯を解かれ扱きを抜き取られ、たちまち腰巻一枚に剥かれてしまった。その腰巻にも手を掛けられて、さすがに乙女の本能が最後の抵抗を試みさせたが、相手は一人どころか大の男が三人掛り。一糸まとわぬ素裸にされてしまった。

これから何をされるかは分かりきっている。軽はずみな行ないに慚愧した千代だったが、男どもは意想外の挙に出た。あらかじめ用意していたらしい白い薄物を着せ掛けようとする。すこしでも肌を隠せるならと、千代は抗わなかった。きちんと付け紐まで結ばれて、地獄に仏の

心境になった千代だが、口に布切れをねじ込まれて、またもや恐慌に捕らわれた。布切れは次々と口に押し込まれて舌も圧迫され、容易には吐き出せない。

さらに、白い布で両手を縛り合わされる。

「暴れるなよ。じっとしてりゃあ、そのうち出してやるからな」

すっぽりとうずくまれる大きさの桶に押し込まれて、折り曲げた膝と首をこれも白い布でつながれた。男どもに逆らう気力も無いが、あったとしても立ち上がることすらできない。

「おおっと。死人に髷はおかしいか」

訳の分からない言葉とともに、髪飾りを抜き取られ髷をほどかれた。そして、上から蓋をされてしまった。

暗闇の中で、息をするさえ恐ろしい。

(これは……まさか、棺桶では)

ここが寺だったことを思い出して、千代は心の臓をねじ切られるほどに怯えた。

(死人とか言っていたような……)

耳を澄ましても、物音ひとつ聞こえない。

闇の中に時がわだかまって、一刻(ひととき)が過ぎたのか一晩も経ったのかさえ見当がつかない。もしかして、もはや土中に埋められているのか。そんなはずはない、小屋の外へ運び出されてもいないのだからと。疑心暗鬼というも愚かな不安に苛まれる。

微かに物音がして、眩い明かりが差し込む。上目遣いに見上げると、凶悪な面構えの男が覗き込んでいた。千代を棺桶に詰め込んだはいいが、まさか布切れが喉につかえて死にかけてはいまいかと、ほんの小半刻ばかり様子を伺っていたのだとは、千代の知るところではなかった。

「これから、ちっとばかり棺桶を動かすからな。おとなしくしてるんだぞ。殺したりはしねえから、心配するな。用が済んだら、きっちり家へ帰してやる」

再び蓋をかぶされて。がたごと物音とともに、何度も桶が傾けられた。そして最後に、ぐっと持ち上げられたのが分かった。

どこかへ運ばれているらしいと、規則正しい揺れで見当はついたものの。何処へはもちろん、何故こんな目に合わされているのかも分からない。闇と恐怖とに心は圧しひしがれて、いつしか千代は気を失っていた。

もしも千代が意識を明晰に保って周囲の様子に気を配っていたとしても、助けを求める機会は無かったに違いない。三人の男のうちのひとりは草臥れた羽織を着込んで手には数珠を持ち、桶を担いでいる二人もそれなりに身なりを整えて、いかにも貧乏人の葬儀を装っていたからだ。しかも、城下を離れて人通りも疎ら。もしも桶がひっくり返って千代が外へ投げ出されてさえも、身体を丸めて縛られている死体が生きているかもしれないと疑うのは、逢魔時とあっては難しかっただろう。

桶が横倒しにされ身体が床に放り出されて、千代はようやく意識を取り戻した。

年の頃は三十手前、明らかに堅気とは異なる凄惨な色香をまとった女が、千代を見下ろしていた。

「あちきは楓。と名乗っても、お前には分からないだろうがね。お前の親父にふた親を殺され、廓(くるわ)に売られ、揚げ句は親の仇に水揚げされた足抜き女郎さね。あちきの味わった地獄の四半分なりとも、お前に味わわせてやるよ」

千代には、楓と名乗った女の言葉が、まるきり理解できなかった。それはもちろん、父が商人に銀子を用立てて、その取り立てが厳しく、誰彼から恨まれているとは、まったく知らないわけでもないが。まさかに人を殺めているなどとは信じられない。
しかし真実はどうあれ、目の前の女は夜叉のような顔つきで千代を睨みつけている。
「地獄は明日からってことにして、今夜は極楽へ逝かしてやりな」
楓が、紋付を着た男に向かって顎をしゃくった。
「へっへ……極楽ねえ」
男は手早く衣服を脱いで、六尺褌一本になった。
そのあいだに、これは棺桶を担いでいた二人のうち目端の利きそうな奴が、広い部屋の片隅から荒縄を持ってきた。
「縛るんじゃないよ。そうそうあっさりと観念させちゃあ、面白くない」
「分かってらあね。おい、千代。おとなしくしてりゃあ、乱暴はしねえ。ちょっとでも暴れたら、ふん縛るからな」
六尺褌になった男が、千代の身体を縛めている布をほどいた。だけでなく、素肌を包んでいる経帷子までも剥ぎにかかった。縄で縛るという脅しに怯えて、千代は抗えない。
「そうそう、いい子だ。その調子で、おとなしくそこへ寝転がっちゃあくれめえか」
男の前で素裸で寝転がる。それが何を意味するか察せられない千代ではない。
やはり、わたしを拐わかしたのはこれが目的だったのか。とすれば、男どもは目的を果たさない限り、家へ帰してはくれない。そして、抗えば。縄で縛られて、結句は犯されてしまう。
咄嗟にそこまで考えて、千代はおのれに引導を渡した。強張る手足を動かして、板の間にのろ

のろと仰臥した。さすがに、羞ずかしさで顔を覆った。背中も尻も太腿も、床に触れている肌が寒さに鳥肌立った。男どもに見られているだろう身体の表面は、羞恥で熱く火照った。
「ずいぶんと諦めがいいね。十年前のあちきとは大違い。もしや淫乱の気があるのかね。そうだ、銀さん。伸ばし達磨にしてやりなよ」
銀さんと呼ばれた六尺褌一本の男は、口の端でにやりと嗤って、千代の両足をつかんだ。
両脚を高々と持ち上げられて、千代は金切り声をあげたのだが、口の詰め物のせいでくぐもった呻きにしかならない。左右に割り開かれて、頭の上まで折り曲げられる。戻そうとしたが、十九の小娘が男の力に敵うはずもない。
「む゛ま゛あ゛あ゛っ……」
「あちきが押さえててやらあ」
楓が千代の頭の向こう側に座り込んで、顔を覆っている手を引き剥がすと、足首もろとも押さえ込んだ。千代は、腰を天井へ向かって突き上げた大股開きの、女としては耐え難い姿で身動きを封じられた。
「あちきが廓で舐めさせられた辛酸のあれこれを、そうさね、一月分くらいは一晩で味わわせてやるよ。恨むんなら、父親を恨みな」
楓は口をすぼめて唾を溜めると、ぺっと千代の顔に吐き掛けた。
「んんっ……」
千代は顔をそむけたが、唾はべっとりと顔に貼り付いている。
「へっ、別嬪さんも台無しだね。銀さん、さっさと突っ込んでおやりよ」
伝法な口調で命じられて、火に油を注がれたように、男が褌をほどいた。こういった艶がか

った修羅場にも慣れているのか、すでに魔羅は滾り勃っている。手に唾を吐いて亀頭にまぶす。

「情けを掛けるんじゃないよ」

「乾き切った生娘にいきなり突っ込んじゃあ、こちとらが痛いんだよ」

情婦(いろ)の仇に掛ける情なんか持ち合わせちゃいねえよと、楓の御機嫌を取ったつもりか、荒々しい仕草で千代に覆いかぶさっていく。左手で上体を支えながら右手で魔羅の根元を握って、ぱっくりと開いている鮭肉色の割れ目に亀頭を突き立てた。

「み゛ゃま゛あ゛あ゛っ……ああああ」

太い杭を股間に打ち込まれたような激痛に、千代が泣き叫ぶ。

「くうう、締め付けやがる」

感に堪えたように男がつぶやいて。あわてて付け加える。

「ごりごりするばかりで、ちっとも良くねえ。新鉢(あらはち)にこだわる旦那衆の気が知れねえや」

「おべんちゃらは、よしとくれ。なんだい、そのにやけ切った顔は」

「おめえとやるときにゃ、もっと蕩けてるぜ」

「いいから、さっさと埒を明けちまいな」

「いいのか。長引かせたほうがつらいだろうに」

「思いっ切り荒腰を使ってやれってんだよ。裂けたばかりの傷口を抉ってやるんだよ」

「へいへい」

割られた新鉢の激痛に苛まれている千代の耳に、二人の掛け合いは素通りしている。目は、明けると不気味に笑う夜叉が逆しまに覗き込んでくるので、恐ろしくて閉じている。闇の中で、激痛だけがうねっている。そのうねりが、いっそう激しい具風大波となって襲い掛かってきた。

「んんんっ……んんっ……んんんん」
腹を下から突き上げられて、激痛が苦鳴となって噴き出る。閉じた瞼から、とめどなく涙があふれる。
(お嫁に行けない身体になってしまった)
激痛のなかで、それを切れ切れに思う。
一刻（ひととき）とも二刻（ふたとき）とも分からぬ時が渦巻いて、実際には三十回も抽挿したかしないかだが、ついに具風と大波が焉んだ。男が千代から抜去して、夜叉も手足を放してやった。
千代は俯せになって身を丸め、放心している。いきなり拐わかされて、何が何だか分からない劇痛のうちに身を穢されて。この暴漢どもが約束通り家へ帰してくれたとしても、どうして明日を生きられようか。死んでしまいたい、いや、死んでしまおう。
しかし千代は、おのれがまだ悲運の戸端口に爪先を掛けたに過ぎないのだとは知らない。
「あお向けになって、脚を広げな。洗ってやるよ」
楓に声を掛けられても、千代はぴくりとも動かない。
「赤ん坊（やや）を孕んで困るのは、てめえだろ」
尻を蹴飛ばされて、びくんと千代が肩を震わせた。板の間の上で、のろのろと身を返した。もはや羞じる値打ちさえ自身には無いとばかりに、自堕落（しだら）なく脚を投げ出す。
楓が一升徳利と竹の棒を持って、千代の横に片膝立てて座り込む。肉（しし）置き豊かな脹脛をはだけた裾からこぼして、まるきり男の目を気にするふうもない。兄貴格の男は情夫、他の二人はその乾分。しかも、この一件の絵図を描いたのは彼女であってみれば、姐御というよりは女親分の貫禄じゅうぶんだった。

楓は千代の口から布切れをひとつふたつ引きずり出して、竹の棒に巻きつけた。それへ徳利を傾けて、中身を染み込ませる。何十人が酒盛りできそうな広い部屋に、つうんと酢の香りが広がった。

「銀さん、暴れねえように押さえておいとくれ」

「おい、おめえたち」

ふたりの乾分が、千代に取りつく。

「ふうん。そんなに血は出ちゃあいないね。男日照りの五人囃でもしてたのかい」

五人組とは、男が五本の指でみずからを弄ぶことをいう。それを、楓は女の身に引き換えて揶揄(からか)っていると、見当がついてしまう千代だった。まったく身に覚えが無いとまでは言えない千代だが、せいぜい実核(さね)を鞘の上から指先で転がすくらいで、中にまで触れたことはない。などと言い争う気力などあろうはずもなく、煤けた高い天井に呆然と視線を彷徨わすばかりだったのだが。

「む゛い゛い゛い゛いっ」

突き殺さんばかりの勢いで竹を女淫(ほと)に突き込まれて、千代は悲鳴をあげた。

逃れようとして跳ねる腰を、ふたりの乾分が押さえ込む。

魔羅に新鉢を割られたのとは、まるきり質(たち)が違う鋭い痛みが女淫を貫いた。傷口に塩を擦り込む痛みなど知らないが、これがそうだろう。しかし、魔羅で引き裂かれるよりはましだった。

とはいえ。親の仇の娘に楓が優しいはずもなく、わざと乱暴にぐりぐりと女淫を抉る。

指南本のひとつに、媾合いのすぐ後に酢で洗えば子種を殺せると書かれてあったのを思い出して、自害するにしても赤児まで巻き添えにするのは忍びないと、千代は辱めに耐えた。

楓の処置が終わっても、千代への狼藉は終わらない。
「さあて。綺麗になったところで、俺たちの相手もしてもらおうかい」
ふたりの乾分は、千代に四つん這いを強いた。
そうだ。男は三人だった。まだ、一人にしか犯されていない。さっきの激痛が後二回も続くのかと、千代は絶望のままに、ぎくしゃくと身体を動かした。乾分が二人ともに褌を解くのを見て、さすがの耳年増目年増も、これから何をされるのか見当がつかなかった。
「まずは、こっちからだぜい」
ひとまわり大きなほうの男が、千代の後ろにまわって尻を抱え込んだ。鵯越（ひよどりごえ）、四十八手のひとつを千代は思い出した。何をされるか分かると、不安は幾分でも薄れる。しかし。
「みみゃあ゛あっ……」
思ってもいなかったところ、尻の穴に熱く硬い感触を押し付けられて、千代はうろたえた。
男は千代の尻を両手で抱えて、容赦なく魔羅を尻穴へ押し込もうとする。
「む゛うう゛っ……あ゛え゛え、い゛あ゛い」
尻穴を無理矢理に腹の奥へ押し込まれる不快な感触。それが重たい痛みに変わって。
ぐぼっと突き破られた。激痛というよりも灼熱が、尻穴を引き裂いた。真っ赤に焼けた鉄杭を打ち込まれたと思った。
「む゛まあ゛あ゛あ゛あっ」
新鉢を割られたときよりも凄絶な悲鳴を、千代は噴きこぼした。
ぎちぎちと尻穴を軋ませて、魔羅が腹の奥深くまで突き挿ってくる。重たい激痛と鋭い灼熱と。そして内臓を押し上げられる、今にも吐いてしまいそうな不快感と。

先に千代を犯した男と違ってこやつは、奥深くまで挿入すると動きを止めた。もうひとりがしゃがみ込むと、小狡そうにちょこまか動く瞳で、正面から千代の目を覗き込んだ。こっちは、兄貴格の男とどっこいの背格好。

「これを取ってやろうか」

口から垂れている布切れを、つんつんと引っ張って尋ねる。

喋れるようになって、やめてくださいと懇願しても聞いてもらえないに決まっている。それでも、口をふさがれている惨めさからは逃れたい。息もすこしは楽になる。千代は、それすらも屈辱に感じながら頷いた。

「大声は出すんじゃねえぞ。どうせ、ここは幽霊が出ると噂の荒れ寺だ。人が来る惧れはねえが、こっちの興が殺がれる。声を出したら」

これだと、匕首で頬をぴたぴたと叩かれて、頷くさえ恐ろしくて、千代は目を伏せた。

それを返事と受け取った男は、次々と布切れを引っ張り出して千代の口を空にした。もちろん、親切心から千代を楽にしてやったわけではない。

「せっかく口が使えるようになったんだ、遊ばせてちゃもったいないぜ」

親切ごかしの男が本性を現わして、まだ半勃ちの魔羅を千代の唇に押しつけた。

雁が首。四十八手のすべてを諳んじている千代は、すぐにそれを思い出した。女の股に突っ込むにしろ小便をするにしろ、そこは不潔なところだ。それを舐めたり吸ったりしゃぶったりする。そんなことが出来るまでに男を好きになるとは、どんな気分なのだろうか。などと、色草紙を眺めながらあれこれ妄想したものだが。実際に、それをさせらせそうになってみれば、ただただ嫌悪の情しか湧いてこない。

「さっさと咥えるんだよ」
楓が横合いから手を伸ばして、四つん這いになっている千代の乳首を抓った。
「きゃあああっ」
悲鳴をあげた口へ、問答無用で魔羅が突き込まれた。
「むぶうっ……」
吐き出そうとしたが、男に両手で頭を押さえられた。
茹でた棒蒟蒻のような舌触りだった。微かにしょっぱくて、ひどく生臭い。そう感じるより先に、嘔吐(えずき)が込み上げてきた。かろうじて喉の奥で止まった。
「いいぜ、タツ。存分に突いてやれ」
タツと呼ばれた大男が、おのれで動くだけでなく、両手で抱え込んだ千代の腰をも前後に突き動かし始めた。
「いあい……むぶううう」
千代の裸身が激しく揺れ動き、口に突っ込まれている魔羅を嫌でもしゃぶらされる。
「もぼお……ゆるひえ……」
口に物を頬張って喋れば、そうなる。
「ごちゃごちゃ言ってねえで、気合を入れてしゃぶってやりな。舌を絡めるとか、唇をすぼめて雁首をしごくとか、やりようは幾らでもあるんだよ」
楓は両手で双つの乳首を摘んで下へ引っ張っている。身体の揺れに合わせて、千代の歳のわりには小ぶりな乳房が揺れ動き、尻穴の激痛に比べればささやかだが、いっそう惨めな痛みに千代は弄ばれる。

「兄哥、もう駄目だ。出すよ」
「ちょい待て。こういうときは、気を合わせるもんだ」
千代の口を犯している男が、みずからも腰を遣い始めた。
尻を灼熱の激痛がうねくり、口の中は喉の奥まで抉られる。千代は生きた心地もなく、一刻（いっこく）も早く生き地獄が終わってくれることだけを願っている。
実際問題として、責苦は一刻（一日を百等分した長さ、すなわち十五分弱）と続かなかった。具合の良し悪しよりは、二人掛りで小娘を苛んでいるという背徳に興奮して、二人はほとんど同時に、あっさりと欲望を吐き出したのだった。
「吐き出すんじゃないよ」
魔羅が引き抜かれるとすぐに、楓が千代の口を手でふさいだ。
「客に見咎められたら、お父さんから手酷く折檻されたもんさ。きちんと飲み下すんだよ」
お父さんというのが廓では楼主を意味するとは、さすがに千代も知らなかったが、何を命じられたかは分かった。とうてい従える言葉ではない。しかし、無理に吐き出せば何をされるか。千代は息を止めて、口の中にぶちまけられた汚濁を飲み込んだ。それが喉に絡まって、けほけほと咳き込んだ。
終わった。惨めな絶望の中で、それだけを千代は思った。しかし。
「ヤス、行けそうかい」
「へへ、面目ねえ」
「俺ぁ大丈夫だよ」
胡坐を掻いていたタツが、布切れで拭っている魔羅を指差した。精を放った直後だというの

に、まったく衰えていない。

「しょうがないねえ」

ヤスに愛想尽かしをしてから。楓は着物の裾を大きくまくって下半身を剥き出しにすると、千代の顔に尻を落とした。

「場つなぎだよ。あちきと遊ぼうじゃないか」

落とした尻をこねて、女淫を口に押しつける。

「てめえに付いてるのと同じ道具さ。どこをどうすればどうなるか、分かってんだろ。舌を使って、あちきを逝かせてみな。そしたら、おまえにもいい目を見させてやらあ」

花菱（はなびし）、十一八一（といちやいち）。花菱とは、女のそこを割り広げれば菱形に見えないこともない。ことに楓のそこはほとんど無毛だったから、なおさらだった。十一八一は、その謂れは知らないが、女同士の睦み合いである。どちらも四十八手ではないが、千代は知っていた。しかし、まさか、それを実際にやらされようとは、今の今まで思ってもいなかった。

やれと命じられても出来ることではない。犯されるのは、雁が音も含めて、されていたのだ。しかし、これはみずからがするのだ。千代は、頑として口を閉じていたのだが。

口も鼻もふさがれて、息が出来ない。ついにこらえられなくなって、息を吐いた。

「きゃはっ」

息で女芯をくすぐられて、楓が嬌声をこぼした。わずかに尻がくねって、千代はかろうじて息を吸えた。それを何度か繰り返したが、まさかに舌で見知らぬ女の芯を舐めるなど出来ることではなかった。

「強情だね」

楓が焦れて、手を伸ばした。千代の股間をくじって肉芽を探り当て、指に摘んで捻じった。
「きひいいいっ」
千代の腰がビクンと跳ねて、そのまま固まった。動けば、みずから実核を痛めつける羽目になる。
「これでも強情を張り通せるってかね」
楓は小さな肉芽を剥いて、小豆半分ほどの柔肉を剥き出しにすると、爪を立てた。
「んぶうううっ」
尖った激痛が、脳天まで突き抜けて。千代はついに屈服した。おずおずと舌を突き出して、花菱を舐めた。
「そうじゃない。焦れったいねえ。襞を唇で啄ばむんだよ。そうそう」
そんな微に入り細を穿った知識までは、千代には無い。楓に命じられるままに舌を動かした。淫唇をしゃぶり、実核を吸い、攣りそうになるまで舌を突き出して女穴を穿つ。
楓の言うことを聞いてるうちは、痛いことをされなかった。どころか、乳首を指の腹で転がされ、実核の先を爪でくすぐられる。そこから、くすぐったい痺れるような心地よさが、さざ波のように湧き起こる。自身で悪戯をする何層倍もの快感だった。しかし、恐怖と屈辱とに支配されている中での惨めな快感は、湧くと同時に儚いサボン玉のように消えてゆく。
「銀次の兄哥。俺、もういけるぜ」
ヤスが兄貴格の男に声を掛けた。右手でしごいている魔羅は、じゅうぶんな凶相を帯びていた。
「おっしゃ。楓、まだ乳繰合を続けるってか」

「よしとくれ。あんたらがだらしないから、場をつないだだけさ。こんな下手くそじゃ、気色悪いだけだよ」
「そうかねえ」
銀次に言われて、タツが板の間に仰臥した。楓が、千代をその横へ突き飛ばす。
「今度は、おめえが上になるんだ。そいつに跨って、てめえで女淫(ほと)に魔羅を嵌めやがれ」
半刻前までは未通だった娘に、無茶な注文である。しかし千代は、どんなふうにすれば良いかを知っていた。付文を見る直前に読んでいた絵草紙そのままの形で良い筈だ。
「終わったら家に帰してくれるって……約束だったじゃないですか」
また匕首を持ち出されるかと恐れながら、それでも千代は相手を詰った。
「見ての通り、終わっちゃいねえだろ。てえか、仇討は始まってもいねえんだい。輪姦(まわし)なんざ、本番前の暇潰しさね。ごちゃごちゃ言ってねえで、とっとと嵌めちまいな。出来ねえってなら、こっちの二人に手伝わせるよ」
言葉が終わらないうちから、銀次とヤスが、両側から千代を抱え上げた。左右から支えて、強引に足を割り開かせる。稚い女児に小便をさせる形だ。
「いやああ……やめて。ひ、ひとりで……します」
「暴れるな。そんなに縛られてえのか」
世には厳しい親もいるが、溺愛されて育ってきた千代は、躾のために扱きで手を縛られたことさえ無かった。罪人の如く縄で、しかも素裸で縛られるなど、匕首で刺されるよりも怖ろしいことだった。
ぐったりと観念した千代を、銀次とヤスは天を指して屹立している魔羅の上へじわじわと下

ろしていった。タツが馬鹿正直に魔羅を手で支えて動かそうとはしないので、千代の腰を揺すって凸と凹とを嵌め合わせた。
「あううう……」
ずぶずぶと貫かれて、千代は悲しい声で呻いた。まだ狭い道を力ずくで広げられて、できたばかりの傷を抉られるのだから、痛くないはずが無かった。しかし、新鉢を割られた痛みに比べれば、もののかずではなかったのも事実だった。
千代が両手を突いてタツの上で四つん這いになる形にして、銀次とヤスは手を放した。
「うへ……こっちは洗ってねえのかよ」
千代の尻を見て、ヤスが興醒めの声を漏らした。尻穴に魔羅を突っ込んで、そのまま引き抜いたのだから、ほとんどは腸の途中に留まっているにしても、すこしは中身が掻き出されてしまう。ヤスはあたりに散らばっている布切れで尻穴を雑に拭った。
「まあ、いいか」
タツの脚をガニ股に跨いで、すでに前を貫かれている千代の尻を抱え込んだ。
「いやああああ……やめてください」
男どもの意図を理解できてしまうだけに、千代は泣き喚いた。もしも相手がひとりだけだったら、一旦は欲望を満たした後だけに、哀願は通じたかもしれない。しかし三人となると、情けは他の二人に怯懦と思われるかもしれず、しかも復讐の念に凝り固まった女の指図である。
「恨むんなら、てめえの父親を恨みなよ」
楓の台詞をまんま借りて、ヤスは無慈悲に尻穴を貫いた。
「きひいいいっ……痛い」

女淫に魔羅を突っ込まれるだけで苦痛に感じるというのに、さらに尻穴まで犯されて、千代は激痛と恥辱とに泣き叫んだ。それを封じるかのように、銀次が口に魔羅を押し込む。

「もぼおお……やえええ」

くぐもった訴えに耳を貸す者など、いるはずもなかった。男三人は息を合わせて、千代を翻弄に掛かった。下から突き上げ、後ろから押し込み、前で押し戻す。

小柄なヤスでさえ、頭半分は千代より大きい。男三人に取り囲まれて揺すぶられる千代は、さながら大嵐の中の小舟も同然だった。しかも、三人が三人とも、自身の具合がいいように千代を使うことは出来ない。大嵐は小半刻近くも吹き荒れて、ようやく焉んだときには、小舟は岩場に打ち上げられたも同然となっていた。

ぐったりと動かない千代の女淫に、またしても楓が酢に浸した布切れを竹棒で突っ込んで子種を掻き出す。女としての憐れみから、そうしているのではない。子を孕ませてしまっては、仇討に差し障りが生じかねないからだった。楓は、千代に一欠けらの同情も持ち合わせてはいない。それが証拠というわけでもないが。結局はみずからの手で千代を、広間の中を貫く太い柱に縛り付けてしまった。

そうして、着崩れたままのしどけない姿で、男たちと酒盛りを始めたのだった。

深夜。千代は寒さに震えながら、絶望と悲嘆とに沈み込んでいた。

素裸で柱に縛り付けられて、その上から筵（むしろ）らしい物を巻きつけられている。いつされたのか覚えていないが、ともかく、千代を生かしておくつもりではあるらしい。

しかし生き延びても、それでどうなるというのか。嫁に行けない身体にされただけではない。

女の身でありながら衆道紛いのことまでされて、日々の糧を食べ人と言葉を交わす口までも魔羅に穢された。これほどの辱めを受けながら、仇討はまだ始まってもいないと、あの女は言った。いったいに、何をされるのだろうか。

ふた親を千代の父に殺されたという途方もない言い掛かりは、しかし心当たりが無いでもなかった。貸し銀の返済が滞ると、父は容赦なく担保を処分していた。暖簾にしても株にしても御墨付にしても、それが無ければ商売をたたむしかなくなる。あるいは、首を吊るか。年頃の娘がいれば、それも担保にされたのかもしれない。

返さないのが悪いのだから、逆恨みには違いない。しかし。もしも自身がそういう目に遭ったらと考えると、楓の恨みも分からなくはない。相手を理解するということは、この場合、非道理不尽を受け容れてしまうということでもあった。わずかでも同情の余地がある相手に害を為されたら、自身は怒りと悲しみをどこへ持ってゆけばよいのだろう。

それにしてもと、千代は楓の意図を量りかねていた。仇討なら、千代を囮にして父をおびき出し、殺すつもりなのだろうか。それとも、身代が潰れるほどの身代金をせしめるのか。

絶望、恐怖、悲嘆、不安。そして、俳句の季語では水ぬるむとはいうものの、真冬と変わりのない寒さ。眠りなのか気絶なのか曖昧な闇の中に、千代の意識は溶け込んでいった。

蝶乱舞

早朝。下腹部の不快に、千代は覚束ない微睡（まどろみ）から引きずり出された。昨日の夕刻に拐わかされてこの方、用を足していない。尿意は差し迫っていた。

あたりを見回して。男三人と女一人とが、枕を並べて寝ている。枕と、布団。千代がふだん使っている夜具に比べれば貧相な襤褸だが、とにかく寒さは凌げる。筵一枚とは大違いだ。

声を掛けようかと迷ったが、鬼を起こすようなものだ。まだ半刻やそこらは我慢できるだろう。

千代は、さらにあたりを見回す。ここは破れ寺だと男のひとりが言っていたが、その通りだった。脇侍は無くなっており、持ち出すには手間の掛かる大きな本尊の千手観音は残っているものの腕がほとんど取れてしまっている。障子の破れに継ぎが当ててあるのは、この者たちの仕業だろうか。とすると、ここは一時凌ぎの場ではなく、根城なのかもしれない。

隠れ家を知った者を、おいそれと解き放ってくれるだろうか。死んでしまいたいと思いながらも、やはり不安は募ってゆく。

「なんだい。もう起きてんのかえ。まあね。あんな目に遭わされてこんな格好にされて、まさかに白河夜船でもあるまいが……おお、寒い」

起き上がった楓は外へ出ようとしかけて、千代を振り返った。

「もしかして、厠へ行きたいんじゃないのかえ」

「はい、お願いします」

何も考えずに返事をした千代だったが、楓の意地悪そうな笑みを見て、嫌な予感を覚えた。果たして。

「銀さん。こいつ、小便がしたいとさ。面倒、見てやっとくれな」

男たちは動かない。

「ええい、寝穢いお人だね」

楓が取って帰して銀次を足蹴にした。
「あの……縄を解いてください。場所を教えてもらえば」
「逃げようたって、そうはさせないよ」
「逃げたりはしません」
素裸では逃げるどころか外へ出るさえ叶わないのに。楓は耳も貸さずに銀次を蹴り起こした。
寝惚け眼（まなこ）の銀次が楓の言葉を聞いて、苦笑いする。
「どうせなら、端の二枚にも手伝わせたいんだろ」
端の二枚とは、千代の知らないことだが連中の二つ名に由来する。横っ飛びの銀次、桂馬の辰、香車の安。桂馬と香車は盤面で端に並んでいる。しかしこれからも、千代が耳で聞いた通りにタツとヤス、片仮名で表記していく。
「ふふん。男三人に見物されながらの放尿（ゆばり）かい。出るもんも出ないんじゃないかね」
「そんときゃ、三人掛かりのときみたいに、抱っこしてシートトトってな」
銀次は二人の乾分を叩き起こして、趣向を説明した。
「へへえ、こりゃいいや。蹴転（けころ）にだって、そんなことすりゃあ、袋叩きにされちまわあ」
三人が千代を取り囲んだ。
「いや……赦してください」
筵を剥ぎ取られて、千代は荒縄で縛られて身動きできない裸身を縮こませる。
「いやあっ、やめて」
肌に手を掛けられて、悲鳴をあげた。
「いいよ、やめておやりな」

楓の言葉に、男たちのみならず千代までが、ぽかんとした。
「そんなに嫌なら、放っとくさ。罰当たりにも、御仏の目の前でお漏らしをしな」
千代は愕然とした。男たちの見世物になりながらの放尿を拒んでこのまま捨て置かれれば、いっそう羞ずかしい始末を招いてしまう。
「さあ、どうするんだい」
「………」
迷いは当然だが、答えも必然だった。
「厠へ……っ、連れて行って……ください」
楓が銀次に目配せすると、たちまちにタツとヤスが千代の身体に取り付いて。乳房をつかみ尻を撫で股間にさえ手を差し入れながら、荒縄を解いた。が、すぐに楓がしゃしゃり出て、千代を改めて後ろ手に縛った。手首を高手小手に引き上げて、縄を胸乳の上下にも巻く。
「いつ見ても、鮮やかな腕だな」
「門前の女郎、縛られた縄を覚えるってね。あちきに引導を渡してくれた役人の直伝さ」
へっと口を歪めて。銀次が縄尻を取った。
「そら、立てよ」
千代は立ち上がろうとしたが尻餅を搗いてしまった。目眩がするほどに羞恥を感じていたせいもあるが、腕を使えないので身体の釣り合いを取りにくい。腰を打ちつけたはずみに、あやうくちびりかけた。片膝を立てて、股が開くのを羞じながらもゆっくりと立ち上がった。
「どうも、危なっかしいな。引っ張ってやるぜ」
銀次はさらに荒縄を持ってきて、千代の腰を縛った。後ろで結んで、縄尻を脚の間に通して

前へ引き上げ、腰縄に絡めた。
「歩けよ」
つんつんと縄尻を引っ張る。
「あっ……」
歩くどころか、千代は股をすぼめ腰を引いて、たたらを踏んだ。股間を通る荒縄が女淫に食い込んで、無数の針でつつかれるような刺激に困惑したのだ。鋭い痛みは、ある。しかし、それ以上に。くすぐったい疼きがあった。まったく未知の感覚だった。強いていえば、実核をおのれでくじったときの甘い疼きに似ていなくもなかった。それほどには尖った疼きではない。女淫全体に広がる疼きだった。
「歩けと言ってるんだぜ」
にやつきながら、銀次は縄をぐいと引っ張った。
「あっ……」
くすぐったい疼きが消えて、無数の針が女淫に突き刺さる激しい痛み。それでも、縄に引かれて千代は足を前へ運んだ。その動きが縄をこねくって、痛みは減らずに、また妖しい疼きが女淫を苛む。
「おおい、転んじまうぜ」
後ろからヤスが千代の肩を支えたが。
「タツ。おまえが尻を押してやれ」
自身は千代の斜め前に立つと、腕を伸ばして乳首を摘んだ。
「俺も引っ張ってやるよ」

乳首を前へ引っ張る。
「やめてください……歩きますから」
訴えに耳を貸す者はいない。千代は股縄を引かれ乳首を引っ張られ尻を押されながら、痛いのかくすぐったいのかも判然としない心地で、本堂の外へ連れ出された。
楓が先に立って、本堂の裏手へ千代を引きずり込んだ。
「厠までは歩けそうもないね。ここで出しちまいな」
「歩きます。お願いですから……」
「ここで小便しちまいなって、言ってんだよ。出来ないなら、このまま連れ戻すよ」
銀次が股間の縄を引き抜いて、そのまま縄尻を持った。
「あの……」
「目を放しちゃあ、逃げないとも限らねえ。ちゃんと見ててやるから、さっさと小便しちまいな。なんだったら、大のほうもひり出すか」
銀次に言いつけられて、タツが千代の肩を押さえてしゃがませる。
男三人が千代を取り囲み、楓は二間ほど離れて見物している。
千代は観念せざるを得なかった。出さないまま連れ戻されれば、遅かれ早かれ粗相をしてしまう。破れ寺とはいえ御仏の前で粗相をするなど、羞ずかしいだけでなく畏れ多い。
千代は目を閉じて、小水を放とうとした。が……出ない。尿意は差し迫っている。なのに、ちょろっと漏れ出る気配すらなかった。朝の冷気に曝された千代の裸身に、いつしか脂汗が滲んでいた。
「しょうがないねえ。手伝ってやるよ」

楓が千代の前にしゃがみ込んで、崩れた髷から簪を抜き取った。軸の先で千代の女淫をつつく。千代は立って逃げようとしたが、タツに押さえ込まれた。
女淫の上のあたり、小水の出る穴に尖った軸先を突き挿れられて掻き回されて。焼けるようなむず痒さを感じると同時に。頑なに水を堰き止めていた堤にひび割れが走った。
ぷしゃあああああ……
「おっと」
楓が飛び退く。破れた堤は、あふれんばかりだった水を勢い良く迸らせて止まらない。
「あああ……」
千代が切なげに呻く。それはこらえていた尿意を解き放った安堵か、見物されている羞恥か。
出し終えても、千代はしゃがんだままだった。
「あの……落とし紙を」
銀次がせせら嗤う。
「紙があったところで、手を使えなきゃどうにもなるめえ。俺っちが始末してやるよ」
腰縄の縄尻を最前のように後ろから前へ股間を通した。
「あっ……」
腰を浮かしかけた千代だったが、またタツに押さえ込まれた。
「きひいいいっ……痛い。やめて……」
銀次が縄を前後にしごく。引き回されていたときの何倍もの力で女淫の内側をこすられて、千代は甲高い悲鳴をあげた。
小水で湿った縄でそのまま、銀次は股間を縛った。

「さあ、戻ろうぜ」
縄尻を真上に引っ張って、千代をごぼう抜きに立ち上がらせた。
「ちょいとお待ち」
楓が小便に濡れた簪を千代の髪に巻き付けて、簡単な垂れ髪（今でいうポニーテール）に結った。
これもおのれへの辱めのひとつだと千代は受け止めたが、いっそうの深謀遠慮があるとは気づくはずもなかった。
股間の痛みと疼きとむず痒さとに惑乱されながら本堂へ連れ戻されて。腰縄と股縄は解いてもらえたものの、後ろ手に縛られた縄尻を柱につながれた。他に身の置き様も無いので、千代は柱に向かって身をくっつけるようにして正座した。
やがて、楓と銀次が連れ立って出て行き、かえって千代は心細さを覚えた。頭目格の二人がいなくなって、乾分二人が図に乗って悪戯を仕掛けてこないかと怯えたのだ。そんなおのれを、これほどまでに穢されて今さらと自嘲してもみたが、百の危害を加えられたからといって、新たな一が怖くないはずもなかった。
しかし、千代の不安は杞憂に終わった。ヤスとタツは、膝が当たるほどに近寄って座り込み、しげしげと千代の裸身を眺めたりはするが、手は出してこなかった。野良犬は野良犬なりに躾けられているらしい。
楓と銀次は半刻ほどで戻ってきた。握り飯やら干物やら、今夜の飲み料らしい一升徳利やらを持ち帰っている。つまりは、ここで煮炊きするほどには住み込んでいないのだが、千代にはどうでもいいことだった。

「おまえも食いなよ」
千代の前に八ツ手の葉が広げられて握り飯が置かれた。水を入れた木の椀も添えられている。千代は楓を見上げたが、憎しみのこもった眼差しを浴びてすぐに目を伏せた。

昨日の昼に軽く湯漬を食したきり、男の精汁の他は一切飲み食いしていないにも関わらず、飢(かつ)えは感じていない。けれど渇(かわ)きに喉がひりついている。千代は正座したまま上体を折り曲げて、口を椀に近づけた。が、どうにも届かない。

思案した挙げ句、椀を倒さないよう後ろへ下がって、羞じらいを投げ捨て椀を挟んで脚を伸ばしてから、前へにじり進んだ。どうにか椀の縁にかじりつけた。

ずじゅううう。音を立てて水を啜った。甘酒よりも冷やし飴よりも甘露な、干天の慈雨だった。

楓が、ふんと鼻で嗤って、からかってやろうと口を開きかけたが、結局は何も言わなかった。千代が食べようとしなかった握り飯は、小半刻もすると取り上げられて、ヤスとタツが食べてしまった。

——陽はまだ高いから未(み)の刻前か。身なりを整え大きな手提げ箱を携えた男が、案内を乞うこともなく本堂に入ってきた。楓が丁重に出迎える。
「先生、お待ちしておりました。早速に支度を致しますので」
ヤスとタツが、大きな戸板を運び込んで床に置いた。四隅と長手の中ほどには太い鎹(かすがい)が打ち込まれている。銀次が千代の後ろ手を解いて、戸板の上に俯せにさせた。
「何をするんですか……」
無駄と分かっていても、問い質さずにはいられない。

「ちっとばかし痛い目に遭わすから、暴れない用心さ」
男三人掛かりで、千代の手足を大の字に引き伸ばして、四隅の鋲に縛り付けてゆく。腰にも縄を巻いて中ほどの鋲に結び付け、身動きできないようにしてしまった。
新参の男が道具箱と共に、千代の横に座り込んで。顔をしかめた。
「縄の跡が残ってるではないか。あれほど、肌を傷付けるなと言っておいたのに」
「そんなにきつく縛っちゃいませんよ。あちきより五つも六つも若くて肌に張りがあるから、一刻もせずに消えますさ」
着物を脱ぎながら楓が言い返した。腰巻ひとつになって、肌色をした襦袢を着込む。ぴたりと肌に吸い付いて、ちょっと見には裸と変わらない。役者が舞台の上で肌を曝すとき身に着ける肉襦袢だった。
楓が千代の前に立って、背中を見せつけた。
一面に紺色の線で絵が描かれていた。大きな蝶々が翅を広げた図を紅葉の葉が取り巻いて、乙の字の角を丸めて横に引き伸ばしたような線が何本か腰のあたりを走っている。川の意匠のように見えるが、線の右端は小さな鼓に繋がっていた。
「これと同じ絵柄をおまえの背中に彫ってやるよ」
言葉の意味が分からず戸惑っていた千代だが、肉襦袢を着た役者が諸肌脱ぐと、決まって文身(いれずみ)が露わになるのを思い出した。
「まさか……入墨」
震える声で尋ねた。
楓が邪悪に微笑んだ。

「その、まさかさ。残念だが、彩までは入れないけどね」
「なぜ、そんなことを……」
「さあね。仇討ちに欠かせない手順だってことだけは、教えといてやるよ」
「………」
昼日中というのに、目の前が真っ暗になった。
操を穢されて嫁にいけなくなったとはいえ、知らん顔をして日々を過ごすことも出来なくはない。しかし入墨などされては、湯屋へ行けないのはもちろん、内風呂さえ使えない。親に見られるのも困るなどという生易しいものではない。万一にも使用人に気付かれて世間に言い触らされでもしたら、首を括っても追いつかない。
いや、死ぬことすら出来ない。湯灌のときに見つかってしまう。
「いやあああああっ……」
千代は声の限りに叫んだ。縄を引き千切ってでも逃れようと、渾身の力でもがいた。
おいきたと、ヤスとタツとで両肩と二の腕を押さえつけ、銀次が馬乗りになる。昨夜から散らかりっぱなしになっている布切れを楓がかき集めに掛かったのだが。
「おとなしくしねえか。銀さん、やっとくれ」
「悲鳴がまったく聞こえないのも風情が無い。縄を噛ますくらいにしてくれ」
この彫師も相当なタマではあった。
荒縄の結び瘤が千代の口に押し込まれ、撥ね上げた髪とひとまとめに頬を縊った。猿轡と同時に、背中に髪が散るのを防ぐ一石二鳥だった。楓が千代を垂れ髪にしたのも、最初からこの形を目論んでいたからでもあった。

「むうう……」
千代は半ば観念して、それでも呻きを漏らしてしまう。
「では、仕事に掛かるか」
彫師が道具箱を広げて矢立を取り出した。楓を千代の向こう側に寝そべらせて、見比べながら蝶の下絵を千代の背中に写し取っていく。肉襦袢の絵もこの男が描いたものであってみれば、まったくの瓜二つだった。
そして、いよいよ入墨。四本の針先を斜めに揃えた針棒に墨を含ませて、肌に突き刺す。突き刺して、ピチッと刎ねる。
「ひいっ」
嫋やかな悲鳴。指先を針で突いたほうが痛いくらいだと、絶望の中にも微かな安堵を見出した千代だったが。
ピチッ、ピチッ、ピチッ、ピチッ……
何十回と繰り返されるうちに痛みが積み重なっていく。
「くっ、くっ、ひいい……きひいいい」
呻き声が次第に甲高く、悲鳴に変わってゆく。背中は脂汗に濡れて、墨を入れられたところには血が滲んでいる。
彫師も根を詰めている。ひとしきり彫り進めると、手を止めて額の汗を拭う。
その間も、針に傷付けられた肌は痛みを千代に送り続ける。熱を帯びて、背中一面が薄桃色に染まる。
薄桃色の肌に刻み付けられてゆく紺色の太い輪郭。見る者の目を愉しませるが、当人にとっ

ては生き地獄の苦しみ。後に千代が墜とされる真性の生き地獄に比べれば、極楽の安逸といっても足りないくらいなのだが、蝶よ花よと乳母日傘で育てられた箱入り娘にとっては、生まれて初めて直面させられた責苦だった。

一刻もすると、押さえつけられなくとも身じろぎひとつしなくなって呻き声も途絶え、虚ろに見開かれた目から光は失せて。それでも、さらに一刻の余も入墨は続けられて、ついに大きな蝶が千代の背中に取り憑いたのだった。

「今日は、ここまで。明日はまわりの飾りを彫って、それから三日もすれば傷も落ちつくだろう。暈（ぼか）しも彩（いろ）も無しとは、なんとも勿体無いが」

彫師が千代の背中を拭って、血止めの油を薄く塗っていく。

「夜目にも見分けがつきやすいのは筋彫だとおっしゃったのは、先生じゃないですか」

「む、それはそうだが。ところで、わしはもうひと働きせねばならんかったな」

「ひと遊びの間違いじゃねえですかい」

銀次が、千代の縄を解きに掛かったのだが。

「傷が落ち着くまで、その娘は縛っておくのが無難だろう。とはいえ、背中には触れぬようにせぬといかん。そこで、こういう趣向は如何かな」

彫師がみずから縄を取って、無抵抗の千代を縛り上げた。俯せのまま脚を正座の形に折り曲げて尻を高く突き出させ、腕を引っ張って手首と足首とをひとまとめに括った。四十八手には無い形だが、名付けるとすれば、理非知らずの裏返し、あるいは緊縛鵯越か。

これなら彫り上げたばかりの絵柄を愛でながら思う存分に腰を遣えると、彫師は自慢して。早速に千代の尻を抱え込んで、いきり勃った魔羅を突き立てた。

千代はわずかに尻を揺すって逃げるような動きをしたが、まだ意識は定かでない。十九とはいえ熟れた女に比べれば人形のような小娘を好き勝手に弄んで、彫師は埒を明けた。

例によって、楓が酢で壺の奥まで洗って子種を始末する。

「このままじゃあ、一人ずつっきゃ出来ないね。銀さんは、どこにするんだい」

「おめえの望みで、ひと通りは突っ込んだが、俺にも間夫の操立てってのがあらぁ。とはいえ、お釜は御免だ。食ってねえといっても、溜まるもんは溜まるからな」

三つのうち二つが駄目なら残りは一つだとうそぶいて、銀次は千代の猿轡を解いて身体を立てた。開いた脚をいっそう開かせて、その間に割り込み、口に魔羅をねじ込んだ。

「むぶ……ううう……」

ようやくに千代は正気づいて。無理矢理に奉仕を強いられる。といっても、舐めろしゃぶれとうるさい注文はつかない。女淫と同様、ただ肉穴として魔羅を突き立てられ、中を遮二無二抉られるだけだった。

しかし、喉の奥に精汁を叩きつけられて、それを飲めと強いられたのは、昨日と同じだった。

ヤスは銀次に倣って口唇を使い、タツのほうはごく普通に女穴に突っ込んだ。

昨日まで未通女だったとはいえ、一日のうちに四人から延べ六回も犯されている。弄られてぬかるんでもいた。多少の違和感があるだけで、タツの図体に似つかわしい逸物をすんなりと受け挿れてしまう千代だった。

昨日のように入れ替わり立ち替わり、あるいは三人総掛かりといった凌辱にまでは至らず、三人が一回ずつ埒を明けただけで、千代は捨て置かれた。手首だけを括られて座った姿で、破れ天井の梁から腕を吊るされたのは、わざと寝転がったり背中を掻いたりして、彫ったばかり

の入墨を台無しにされない用心だった。
今度は銀次を見張りに残して、楓と乾文二人が外出(そとで)する。銀次は、まさかに千代を憐れんでのことでもなかろうが、悪戯を仕掛けるどころか視姦にも及ばず、居眠りを決め込む。
千代は、またしても荒縄の猿轡を噛まされたまま、虚ろに床を凝視めている。死にたいという想いさえ、とうに涸れ果てていた。
楓たちが戻ってきたのは、陽が没して小半刻も過ぎた頃だった。男どもはさっそくに貧相な酒盛りを始めたのだが。
楓が千代の猿轡を解いて、冷めたふかし芋を口に押しつけた。千代はただ口を開けないのではなく、唇を引き結んで、拒絶の意志を露わにした。縛られていようと、飲み食いしなければいずれは死ねる。口をこじ開けて食べ物をねじ込まれようと吐き出してやる。
「そうかい。それじゃあねえ」
楓が短い竹筒を持ってきた。匕首の鞘を突っ込んで、竹の節を突き破る。
「銀さん、手伝っとくれ」
楓が不意打ちに腹を殴り付け、苦悶の形に開いた口に銀次が竹筒を押し込んだ。そのまま仰向かせる。楓が水の入った木椀を片手にふかし芋を齧り、くちゃくちゃと音を立てて咀嚼して飲み込んでみせてから、千代を脅かす。
「口移しに食べさせてやるよ。水を流し込めば、嫌でも飲み下さずにはいられないよ」
千代は怖気(おぞけ)を震った。いきり勃った魔羅を見せつけられたときのそれではなく、蛆虫や蜈蚣が肌を這うときのような、それ。
「それとも、お上品に食べるかえ」

一も二も無く、千代は首を縦に振るしかなかった。
「そうかい。それじゃあ、お食べ」
目の前にふかし芋が転がされた。しかし、腕を吊られている。口から竹筒が引き抜かれ、銀次の腕から解き放たれても、芋には手が届かない。
「ちっと緩めてやるよ」
縄がすこしだけ緩められて、手を臍のあたりまで下ろせるようになった。
「さっさと食えよ。食わねえと、口移しだぜ」
「でも……手が届きません。もっと縄を伸ばしてください」
「甘ったれるんじゃねえよ。どうやって水を飲んだか思い出しな」
あのときは脚を投げ出して座って身体を折り曲げて。
同じようにして見たが、あと一寸かそこらが届かなかった。
思い余って、千代は床に身を投げた。吊られた腕を、これまでとは逆に出来るだけ上へ突っ張って。芋虫のように這って、芋にかぶりついた。
「お嬢様の作法は、あちきら下衆とは違って優雅なものだねえ」
楓が高笑いした。
千代は齧り取った芋をろくに噛まず、屈辱と共に飲み下したのだが。空っぽだった胃の腑に食べ物が落ちると、浅ましいまでに空腹を感じた。死にたい想いも、裸身を男どもの目に曝していることも忘れて、がつがつと貪り食い、ようやくに人心地の欠片を取り戻したときには、ふかし芋は跡形も無くなっていた。
「そんなにがっついちゃあ、胸焼けを起こすぜ」

水を湛えた木椀を与えられて、それも貪り飲んだ。
千代は改めて腕を高々と吊り上げられて、そのまま捨て置かれた。
その形では眠れないだろうと、仕留められた獣のように手足をひとまとめに括られて板の間に転がされたのは、酒盛りが終わってからだった。親切心からではなく、凍え死なれては困るからと、正絹の襦袢と羽二重の布団しか知らぬ裸身に筵一枚が被せられた。
そのせいよりは入墨の傷が発する高熱で、千代は一晩中悪寒に苦しめられながらも、心労の果てに泥のような安息へと引きずり込まれていくのだった。

翌朝には、尿意に加えて便意にまで促されて目を覚ました。両手は前で縛られて、けれど昨朝と同じに股縄に引きずられて裏手へ連れ出されて。
「糞(ばば)を放(ほ)り出しとくと臭うからね」
排便のための穴を、自らの手で掘らされた。壊れてしまった堤は、そう簡単には修復されない。千代は簪にくじられずとも小水を迸らせ、あまつさえ掘らされた穴もきちんと役立てたのだった。さすがに、後始末に使った縄を股間に通されたときには、嫌悪に顔をゆがませ恥辱の涙をこぼしたのだが。それでも抗いはしなかった。付け加えとおくと、縄の汚れた部分は、もっと縄尻に近いところだった。後で使うときの都合を考えたのだろう。
この日も、午(ひる)過ぎから千代は戸板に大の字に縛り付けられて、蝶を取り囲む五つ葉と腰のあたりを流れる川を彫り込まれたのだが。
「ねえ、先生。あちきの乳首、あざと過ぎませんかね」
肌にぴたりと貼り付いている肉襦袢には深紅の乳首が描かれているのだが、生身のそれに比

べると鮮やか過ぎた。
「肌の下に入れる墨だからな」
「でも、これじゃあ夜目にも違いが分かっちまいますよ。同じ色にしちゃあもらえませんか」
「布地に暈しを入れるのは無理だ」
「じゃあ、生身のほうに朱を入れたら、同じ彩になるんじゃありませんか」
彫師が、くくっと嗤った。
「女の憎しみは、とんでもないことを考えつかせるものだな」
「とんでもついでですけどさ。実核にも朱を入れてやっておくんなさいな」
「まさか、女淫まで曝すつもりか」
「まさかですよ。見えないからこそ、色が違ってても構わないんじゃありませんか」
「ほう……」
「どれだけ痛い目に遭わしてやったところで、あちきの受けた痛みの万分の一にも届きませんのさ」
千代は戸板から引き剥がされ、手首足首を縛られて、空中に大の字に磔けられた。ヤスとタツが、両脇に立って腋の下を押さえ込む。
筋彫よりも細い針が三本束ねられて、千代の乳首に突き立てられた。
「う゛あ゛っ……い゛あ゛い゛い」
くぐもった絶叫が広い本堂に響き渡った。
彫師はちょっと眉をしかめたが、ピチッと針を刎ねた。
倍する絶叫。

ピチッ、ピチッ、ピチッ。彫師は非情に乳首を深紅に染めていく。
「いぎゃあっ……ゆういえ……いお、おおいええ」
いっそ殺して。泣き叫ぶ千代を、楓は食い入るように凝視(みつめ)ている。五つも六つも年下の同性の苦悶に、復仇の念だけではない昏い愉悦を見出だしているのかもしれなかった。
小さな乳首への朱入れは、双つ合わせても半刻とはかからなかった。千代は全身汗みずく。叫び過ぎて喉が破れたのか、頬を縊る荒縄に血が滲んでいた。
しかし、これまでの激痛は露払いにしか過ぎない。凄惨な阿鼻叫喚は、これから始まる。
ずっと押さえつけているのは腕が疲れるからと、千代の後ろに戸板が横ざまに立てられて、足首と腰が縛り付けられた。だけでは不足と、膝の上にも縄が巻かれて、隅の鋲に繋がれて。上体を如何によじろうとも腰から下は微動だにしなくなった千代の股間に、針を持たない彫師の手が伸びた。
「鞘を被ってちゃ、やりづらいな。痛くすればするほど、良かったんだな」
とは、もちろん楓への問い掛け。
「それじゃ、こうしようかい」
彫師は無雑作に包皮を剥くと、二本の針で大淫唇の上縁に縫い付けた。
「ひい……」
一昨日だったら魂消(たまぎ)るような悲鳴を引き出していただろう残虐に、千代は微かに啼いただけだった。
いよいよ、彫針が剥き出しの実核に向かう。
千代は顔を背けて目蓋を固く閉じ、荒縄の猿轡をきつく噛み締めている。

ぷつっと針が突き立った刹那。
「ま゛あ゛も゛お゛お゛っ」
血しぶきと共に絶叫を吐き出し、全身を硬直させた。
ピッ、ピッ、ピッと。小豆の半分もない小さな肉蕾に朱の針が突き立っては柔肉を刎ねていく。
「かはっ………」
悲鳴を上げようにも、千代は息を吸うことすら出来ず、四肢を震わすばかり。虚空を掻き毟る手が縄をつかむと、渾身の力で我が身を引き上げて針から逃れようとする。
実核は乳首よりも小さく、ひとつしかない。小半刻のさらに半分も掛からずに朱入れは終わった。と同時に千代は気を失っていた。遅すぎた安息だった。
「おのれでしたこととはいえ、月の障りさながらでは、興も殺がれる。このまま帰らせてもらうよ」
彫師はもうひと働きをせずに帰って行った。
「違えねえ。俺も願い下げだ。それよりも、お糸。おめえを可愛がってやろうじゃねえか」
腰巻に肉襦袢姿の楓を押し倒しに掛かる銀次。
「待っとくれよ。あっちの二人は、どうするんだい」
嫌とは言わないが、乾分の目を気にする楓。
「姐さん、お気遣いなく。俺らは、月の障りだろうが金山寺味噌だろうが、屁の河童でさぁ」
二人は千代から戸板を引っ剥がして、宙で大の字に磔けられている血まみれの裸身に、前門のタツ後門のヤスとばかりに取りついたのだが。

「ちゃんと起こしてからにしな。木偶人形じゃ面白くないだろ」
　面白くないのはヤスとタツではなく楓なのだが。それでも言いつけには従って。頬をビンタしたり乳房を抓ったり。それでも目を覚まさないとなると、煙管を持ち出して鼻から煙を吹き込んで。
　咳き込みながら意識を取り戻した千代に、二人掛りで裏表の立ち鼎。楓には面白くなかったろうが、目を覚ましても心は死んだまま。千代はまったくの木偶人形だった。

　拐わかされて四日目。この日の千代は、腕を吊り上げられて座ったまま、一日を過ごした。たまに縄を緩められたと思えば時雨茶臼の三人掛りで犯され、あるいは鵯越の理非知らずや立ち鼎に縛り直されての二人掛り。楓には駒掛けや茶臼での花菱を三度ばかり。蹴り転がして抱く意から転じた蹴転女郎も斯くやという数を、千代は強いられたのだった。
　そして五日目。楓はヤスを使いに遣って、午後から傷の様子見に訪れるはずだった彫師を巳の刻過ぎには呼び出した。すでに千代は、戸板に大の字磔。肩と尻に木魚やら銅鑼置台やらを宛がわれて、背中の彫物が触れないようにされている。
「まだ彫物を増やしたいと聞いたのだが」
「立たせて大の字にしてるときに思い付きましたのさ。まるで、名前のまんまに蝶が翅を展げているように見えましてね」
　言いながら楓は、ヤスに買って来させた百目蝋燭に煙草盆から切り出した火を移した。
「あちきは、毛抜やら線香やらでほとんどかかわらけになっちまいましたけど」
　両手に百目蝋燭を持って、千代の腰のあたりにかざして。熔けた蝋をじゅうぶんに溜めてか

ら、狙い澄まして傾ける。
「ぎびいいいっ」
昨日針に痛めつけられた実核に熱蝋を垂らされて、千代は海老反りになって悲鳴を上げた。
「まだ声が嗄れてるね。ガラガラ声になられちゃあ困る。口をふさいどくれな」
詰め物にしていた布切れはどこへやったっけと、銀次が探しに掛かるのを、楓が止めた。
「前のは、あらかた反故(ほうぐ)にしちまったじゃないか。褌でも詰めてやんなよ」
へっと、銀次がふり返って。
「俺のは今朝がたに替えたばっかだ。できるだけ汚れてるほうが面白えんだろ。ヤス、タツ。おめえらのはどうだ」
三日も着けっ放しのタツに決まって。汚れた部分を結び瘤にして、千代の口にねじ込んだ。抗っても殴られて言うことを聞かされるだけと骨身に沁みている千代は、涙を浮かべながらも素直に猿轡をされてしまう。
男の獣じみた臭い、据えた糞小便の汚臭に噎せて、千代はくぐもった嗚咽をこぼした。それを小気味よく眺めながら、楓は盛大に蝋をこぼし始めた。
「んぃっ……んん……ん……」
千代の悲鳴は次第に小さくなり、腰も動かさなくなっていったのは、肌に蝋が積み重なって熱さが減じたからだった。じきに、千代の股間は白蝋で埋め尽くされる。
固まりかけている蝋を掌で押さえつけて肌に密着させて。じゅうぶんに冷えてから、一気に引き剥がした。
「んいいいっ……」

千代の腰が跳ねた。熱蝋を垂らされるのとは違う、まさしく生皮を剥がされるような激痛が股間全体に広がった。

蝋を剥がされた後の股間には、淫毛がほとんど残っていなかった。

「ここにも彫物をして欲しいのさ。たっぷり彩を着けてやっとくれ」

「おまえさんは脱がないから、どれだけ違っていても構わんという寸法だな」

彫師は、千代に彫物を背負わせる理由を弁えているようだった。

「それで、何の図柄にするんだ」

「決まってるじゃないですか。背中が、チヨとカエデとイトなんだから。ここにも蝶を彫っとくれな」

実核を頭に淫唇を胴体に見立てて、鼠蹊部から内腿にかけて翅を展げた図柄を楓は所望した。

「なんだったら、胴体に彩を入れてくれてもいいんだよ」

「他人の肌だと思って好き勝手を。まあ、こういう趣向も彫師冥利に尽きるってものだが」

善ならぬ悪巧みは急げとばかりに、さっそくに道具箱を広げる彫師。

千代はまたしても、全身を脂汗にまみれさせながら、声にならない悲鳴を褌の猿轡に吐き出す羽目になった。筋彫から彩入まで一気に仕上げたので、千代の苦悶は午前から戌の刻近くまで四刻にも及んだ。

せめてもの救いは、いちばん肝心の道具が今夜は使えなくされたせいで、娘としての辱めだけは受けずに済んだことだった。

それからさらに六日間、千代は監禁されていた。いっそうの恥辱を与えるためではなく、入

墨の養生である。最初の三日ほどは痒みに苛まれた。背中一面もさることながら、後追いで墨を入れられたところは、どこも女の急所である。掻痒の中に妖しい感覚まで忍び入って、これくらいなら、まだしも針を刺されたほうが手放しで泣き叫べるものをと、喉元過ぎれば何とやらに、千代はもどかしさを募らせもした。

その間も日毎に一度は男どもに三つの穴を貪られていた。もちろん、妖しい官能に弄ばれていようとも、それと凌辱とが混淆することなどなかった。

背中の瘡蓋（かさぶた）が剥げ、乳首と実核にどぎつい紅が染み込み、股間の色鮮やかな蝶は瘡蓋が貼り付いたままに傷が落ち着いてきた、拐かされてから十二日目に、楓たちは姿を消した。

といっても、千代が家まで送り届けられたわけでもない。胡座の間に柱を抱きかかえる形に縛られて、そのまま置き去りにされたのだった。

誰にも見つけられず、このまま飢え死にしても構わない。いや、こんな浅ましい姿を見られるくらいなら、死んでしまいたい。そうは思っても猿轡を噛まされていては、舌を噛むことも出来ない。

――陽も沖天を過ぎた頃。境内に人の気配が動いた。

（お願い、入って来ないで）

一瞬に羞恥が甦ったが、生き恥を忍んででも救けてもらいたい気持ちがなかったといえば嘘になる。

足音がまっすぐ近づいて来て。様子を伺うように戸が引き開けられた。千代は後ろ向きに縛られている。振り向いて相手の顔を確かめる度胸はない。

数瞬、ぴいんと緊張が漲って。

「千代……なのか」
（お父っつぁん……）
世に男は数多（あまた）居れど、今はもっとも会いたくない人だった。
「いあいええ……」
見ないで、来ないで。
しかし。千代の心の叫びが通じる筈もなく。声から我が娘と分かって、駆け寄る喜左衛門。
彼がこの場を探り当てたのは、偶然でも何でもない。
誰にも行方を告げずに娘が姿を消した、その夕刻には貫目屋ではひっそりと大騒ぎになっていた。人目を忍んでの逢引とまでは喜左衛門はともかく、母の妙（たえ）あたりは勘繰りもしたが、まさかに朝帰りするとも思わなかったのだが。翌日に街の木戸が開いても帰って来ない。
自身番への届出はもちろん、月々の付届けを欠かさない同心手伝の親分の手も煩わせ、それでも二日三日経っても消息がつかめず、ついには同心直々の出馬を願った。千代の拉致された先が分からなかったのも道理。貫目屋から十町（約一キロ）ばかり離れた清安寺で姿を見掛けた者がいたばかりに、城下町から静安寺とは真反対の方角へ一里半（約六キロ）も離れた、この南総寺はよもやとさえも思われていなかったのだ。
それが、今日の午の刻すこし前に、童が文を貫目屋に持ってきて、喜左衛門は半信半疑ながらも手代と丁稚にまで駕籠を誂えて駆け付けたという次第だった。
「おまえたちは、外で待っていなさい。戸を閉めるのです」
動転しながらも、娘の無惨な姿を人目に晒すまいとする親心。
何はともあれ、汚れ褌の（とまでは気づかなかったが）猿轡を口から引き出してやり、手首

の縄を解いてやろうと身体の位置を変えたとき。
「これは……」
絶句する喜左衛門。真昼の外の明るさに眩んでいた目が本堂の薄暗がりに慣れて、娘の背中一面に刻み込まれた濃紺の紋々に気づいたのだった。
しかし今は、事の次第を問い質している場合ではない。とにもかくにも、あたふたと縛めを解いて。
小さな両替屋を御家御用達にまで広げた、悪賢くも機転が利き度胸もある喜左衛門。娘に羽織を着せ掛けると、内縁へ駕籠をひとつ上げさせて、後はおのれの手だけで四苦八苦して板の間へ引き込んだ。
羞恥に身を縮込ませている娘を、赤子をあやすようにしながら駕籠へ押し込み、両側の垂れを下ろしてから、駕籠舁き人足を呼び入れた。
手代と丁稚に駕籠脇を固めさせ、自身は先に立って周囲を伺いながら。人目の多い街中を店とくっついた本宅へ連れ帰るのは憚って、城下からすこし離れた寮へ匿った。
それからも、喜左衛門の手配りは抜かりなかった。娘の裸身を見られてはいないが、人足には法外な酒手をはずんで口止めをして帰らせ、自身は娘に付き添い、手代は医者へ、丁稚は女房へと走らせた。
「ともかくも五体満足で戻れたのだ。何をされていようと、命あっての物種です。おまえが幸せになれるよう、わしが万事取り仕切ってやる。決して早まった真似をするんじゃないよ」
傷物にされ肌に消せない烙印を刻まれた娘でも、人並みとはいわないまでもそれなりに女として幸せにしてやる方策を、すでに喜左衛門は考えついていたのかもしれない。しかしそれは、

大きな錯誤を前提としていた。
これほどの恨みを買う因がおのれにあるとは、自明だった。そして喜左衛門にとっては、自身を殺されるよりも店を潰されるよりも、娘をこんなふうにされたほうが、はるかに痛恨だった。それだけに、害を為した相手が復讐は成れりとして、これ以上のことを仕掛けて来ようとは夢にも思っていなかった。
千代を解き放ったのが何よりの証拠だと、喜左衛門は判断したのだった。

第二場　全裸捕縛

千代が寮に匿われて一月の余が過ぎた。すでに弥生。桜の蕾が今にも綻びそうな暖かさは、世間のこと。千代の心の中では梅の花が散ったまま、残った枝には梅の実どころか一枚の葉すら残っていない。
悲嘆に暮れながら、それでも生を永らえているのは、父の言葉に縋っているからではない。喜左衛門が大急ぎで見つけてきた下女、口の利けないトセが片時も傍を離れないせいでもなかった。
何年もの間、夜毎に身を穢され、入墨よりもずっと醜悪な傷を抱えて生きてきた女を知っているからだった。
千代が柱に縛り付けられて置き去りにされた朝だった。楓は初めて千代の前で、肉襦袢を脱いだ素肌を曝した。左脇腹に大きな傷痕があった。金創医の縫った針痕も五筋。

江戸吉原や京島原では遊郭に刀剣の持ち込みは御法度だが、大概の地では野放しである。大酔した武士が何とか流の腕を披露してやるとばかりに、楓の衣装を斬り落とそうとして手元を狂わせたのだという。

以来、肉襦袢で刀傷を隠して同衾するようになったが、おかげで今度（こたび）の意趣返しを思い付いたのだと、楓は自嘲だか自慢だかをしたのだった。

「それこそ正真正銘の傷物にされたって、あちきは生きてきたんだ。綺麗な模様を背負ったくらいで自害なんかしてみやがれ。地獄のそこまで追い掛けてって笑ってやるからね」

逆恨みだろうとなんだろうと、復仇の念に取り憑かれた楓と我とでは、まるで違う。そうは思いながらも、もしも楓の言い掛かりが半分でも真実なら、自害に逃げるのは卑怯だと思えてしまう。そして。まさか実際に手を掛けたわけではないにしても、父の苛斂誅求を苦にして楓のふた親が首を吊ったとかは、じゅうぶんにありそうな話だった。取り立ての不足分として、その娘を廓へ売り飛ばすなどという所業も、父ならやってのけるに違いない。話半分どころか、楓の言葉を千代は丸々信じていた。如何に溺愛されようとも、いやそれだからこそ、父親の非情もくっきりと透けて見えているのだった。さすがに、売り飛ばした娘を自身で水揚げしたという話だけは信じたくなかったのだが。

それにしても、お父っつぁんは何を考えているのかと、千代は不審を募らせている。

いっそ、楓と同じくらいに醜い傷痕のほうがましだと思うことさえあるのだが。きちんと養生をして入墨を傷つけないようにしておれというのが、喜左衛門の言いつけだった。まさか、我が娘を見世物にするつもりでもあるまいに。

喜左衛門は三日と明けずに寮を訪（おとな）ってくれるが、半刻ばかり居て、何も言わずにというか、

何を言っても娘を悲しませるとばかりに、そそくさと帰って行く。
御用聞きも顔を出すが、口の利けないトセとは世間話も出来ず、頼まれた物を持って来ては、金釘流の書付けを見て次の注文を受けるだけ。
だから千代は、世間の動きをまったく知らなかった。
ここ一月ばかり、四人組の押込強盗が跳梁していることも知らない。
頭目は女で諸肌脱ぎ。顔を隠して背中隠さず。夜目にも鮮やかな蝶々の筋彫に家人は目を奪われて、顔はおろか肥えていたか痩せていたかさえ、ろくに覚えていなかった。巷ではいつしか筋彫お蝶と呼ばれるようになり、荒事はすれど殺しも犯しもせず。庶民の人気となって瓦版が飛ぶように売れ、役人は躍起となって、目ぼしい女をひん剥いては背中を検(あらた)めている。そういった雀のピイチクパアチクは、まさしく門前雀羅なのだった。

裸縄掛

何やら外が騒がしい。大小の寮が立ち並ぶこのあたりには、地元の者もあまり近寄らないのに何事か起きたのかと、千代が訝しむうちに。どかどかと足音がして、陣笠をかぶり野袴を着け腰に大小と共に十手を差した与力を先頭に、尻絡げに股引という捕物姿の小役人ふたりが部屋に押し入ってきた。
「その方、貫目屋喜平の娘、千代であるな」
頭ごなしに決めつけられて、この二月ほどの悲哀を忘れて反感が先に立った。
「貫目喜左衛門の娘、千代です。父でしたら、お店(たな)に居るはずですが」

両替商貫目屋の主人喜平は、殿様に苗字帯刀を許されて貫目喜左衛門と名乗っている。奉行所の御役人といえど、然るべき礼儀を払うべきではないか。
しかし与力は、千代の遠回しな難詰を歯牙にも掛けない。
「城下奉行配下、探索方惣与力の赤金文太雄である。役儀により、その方の肌を検める」
赤金の合図で、二人の小役人が千代を押さえつけて着物を剥ぎ取りに掛かった。
「何をするんですか。やめてください。いやっ、いやああ」
たちまちに衿をはだけられ袖から腕を引き抜かれて、乳房も背中も露わになる。
「ややっ。これは、まさしく。筋彫の蝶……」
小役人が瞠目する。
「うむ。こやつこそ、筋彫お蝶に相違あるまい」
赤金が、芝居がかって頷く。そして、まさかの言葉を継いだ。
「他にも刺青が無いか、素裸にして検めよ」
「いや、これだけ明白な証拠があれば、そこまでは……」
「黙れ。下知に従えぬのか」
逡巡する小役人を叱り飛ばす赤金。普段は門番や雑用に携わり捕物のときだけ駆り出される小役人が、同心の上に立つ与力の命に逆らえる筈もない。
あっという間に素裸に剥かれて、羞ずかしい所を隠そうにも腕は背中にねじ上げられている。
「なんと……」
目聡く内腿の刺青に気づいた赤金が、十手で千代の膝をこじて、股間に棲む極彩色の蝶を暴き立てた。

「このまま縄を打て。いや、拙者が縛ってやる」
赤金は千代の両手を首の後ろで重ねて、手首を縛った。その縄尻を首に巻いて前に垂らす。俗に岡っ引きとか目明しと呼ばれる町人が捕らえた者に縄を巻く（縛らない）のは別として、科人に掛ける縄は、男女身分によって厳密に定められている。このような縛り方は法度に違背していたのだが。
「背中の蝶を隠しては、筋彫お蝶を捕らえたと喧伝出来ぬからな」
赤金は先回りで言い訳をした。
筋彫お蝶などという名前は初耳だった。御役人がこれほど無体なことをするとは、およそ極悪人には違いないだろう。とんでもない濡衣だ。
「わたしは、御役人様がおっしゃる筋彫お蝶とかいう者ではありません。背中に彫られた入墨は、賊に囚われて無理矢理に入れられたのです」
「この期に及んで見苦しいぞ。背中の刺青を見せつけて人相風体から気を逸らさせ、夜毎に押込強盗を働いていたこと、明白である。その筋彫の蝶こそが動かぬ証拠、いや生きて動く証拠だ」
「この一月余り、わたしはここから一歩も外へ出ていません。父にでも下女のトセにでもお確かめください。トセは口こそ利けませんが、言葉を聞き分けて身振りで返事ができます」
「身内の者の言葉など、証拠にならぬわ。罪を認めるなら御上にも慈悲はあるぞ。あくまでシラを切り通すなら、相応の覚悟をしておけよ」
しかし。赤金はいっかな千代を引き立てようとはしなかった。床の間を床几に見立てて腰を据え、背中を向けてうずくまる千代を配下の二人に見張らせて、悠然と構えているばかり。

やがて、乱れた足音が近づいてくる。
「こ、これは……」
あわてて駆けつけた喜左衛門が、部屋の前で立ちすくむ。
「赤金様、これは何としたことでありますか。千代は、御年寄の沼田様へ御奉公に上がる身です。このような辱めを与えるなど、赤金様が御咎めを受けましょうぞ」
名字帯刀を許されていても、人別は町人である。そのあたりを配慮しながら、喜左衛門は赤金を恫喝にかかったのだが。
「黙れ。この娘が極悪非道の盗賊、筋彫お蝶であることは、背中の刺青が動く証拠。この姿で市中を引き回して、今宵からは枕を高くして眠れると庶民に喧伝してくれるわ」
それを聞いて、千代は気が遠くなりかけた。盗賊として断罪されれば、死罪は確実。しかし、そんな遠い先のことは実感を伴わない。素裸で衆人環視の中を引き回される。そのことのほうが、よほど羞ずかしくも恐ろしかった。
女を素裸で引き回す。そんな無法も、ときとして黙認されることがあった。たとえば倹約令が厳格に運用されていたときなど。簪一本でも鼈甲金銀細工があれば、番屋に連行しての衣服検。肌襦袢が絹であれば脱がされ、腰巻は木綿でも色を染めていると奢侈品として剥ぎ取られる。親が駆け付けて袖の下が間に合えば大事には至らぬが、さもなければ往来の男どもの目を愉しませることになる。
十年一昔より前の話ではあるが、千代が物心ついてからこっちの出来事でもある。それだけに、赤金の言葉は千代を打ちのめした。
「死にます」

我を忘れて千代は叫んでいた。
「そんな辱めを受けるくらいなら、この場で舌を噛み切って死にます」
「これ、千代……」
うろたえたのは喜左衛門ひとり。赤金は落ち着き払って小役人に命じる。
「それは拙い。こやつに竹轡を噛ましておけ」
自害を封じるだけでなく、御上にとって都合の悪いことを喚き散らす者もいる。竹轡もまた、捕り物には必須の小道具だった。たちまち、千代は自害も濡衣を訴える道も封じられた。もっとも、竹轡そのものにはたいして衝撃を受けていない。汚れた褌の猿轡に比べれば、汚辱が無いだけましだった。
「さて、準備は万端。娘を引っ立てるとするか」
これも言葉だけで、赤金は喜左衛門に目を据えて動かない。
はっと気づく喜左衛門。
「もし、赤金様。後ほど菓子折を御宅まで届けさせますので、なにとぞ、御目こぼしとまでは申しませぬが、一掬の御慈悲なりとも賜りとう存じます」
「五五二十五の饅頭に煎餅が二枚ずつで五十両、四枚なら百両か。さて、菓子折よりも美味な物を、其方は持っておらなんだかな。今すぐにでも所望するぞ」
喜左衛門が苦虫を噛み潰したのは一瞬。廊下へ目を向けたそこには、店を訪れて捕物のあることを告げた小役人と、貫目屋の手代とが突っ立っている。
「与平さん。赤金様の証文を持って来なさい、今すぐです」
「は、はい」

手代が大慌てに廊下を駆け去った。菓子折よりも美味な物とは、赤金文太雄の借用証文である。武家向けには利息を割り引いているとはいえ、積年の元利合わせて二百両にもなっていた。煎餅百枚よりも、確かに美味だった。

「お主の誠意に免じて、良きことを教えてやろう。地獄の沙汰も金次第とは言うが」

牢役人は元より、囚人たちへの賂（まいない）も欠かせない。これを称して、命の蔓という。蔓を持たずに入牢した者は手酷い牢内仕置に掛けられて、まさしく命の蔓を断ち切られかねない。気の利いた者なら、衣服に豆銀を縫い込むか、女淫や尻穴に忍ばせるか。まさか、千代にそんな支度はあるまい。かといって、目の前で行なわれる不正にはさすがに目を瞑れない。

「せいぜい菓子折をばら撒いてやることだな。ことに、吟味方惣与力の残谷郷門（のこりやさとかど）。この者の牢問に掛かれば、如何に屈強な男、気丈な女といえども、犯してもおらぬ罪科まで白状するそうな。故に彼奴（きゃつ）みずから牢問に携わることは滅多に無いが、おまえの娘などひとたまりもあるまい」

「残谷郷門様……で、ございますな」

喜左衛門にとって、初めて聞く名前だった。つまり、借用証を反故にする手は使えない。

喜左衛門が、改めて赤金に平伏する。

「美味は美味としまして、菓子折も手配致しますので、しばらくは聾になっていただけますまいか」

赤金が、そっぽを向いて頷いた。そのまま、目を逸らしている。

「お千代、心して聞きなさい」

喜左衛門が、千代の背中に語り掛ける。

「おまえの背中の彫物は、筋彫お蝶とかいう女賊と瓜二つだそうです。もちろん、私もおまえも、身に覚えのないことと、よっく分かっています。そして、ここが肝心ですよ。お前がみずから罪を認めぬ限り、けっして濡衣で罪に堕とされることはありません。どんなに厳しく問われても、無実の罪を認めてはなりません。つらくても辛抱しなさい。必ず、身の証しが立つようにしてあげます。私ではありません。おまえが御奉公に上がることになっていた沼田様や、お城の重役の方々が動いてくださるのです。ことに沼田様は、おまえが刺青を背負っているのも御存じです。手元に侍らせて愛でてみたいと仰せでした。この意味は、分かりますね」
おまえが幸せになれるよう、わしが万事取り仕切ってやる。それは、こういう意味だったのかと、千代は理解した。背中に入墨のある娘を嫁にしよう婿になろうという男はいないに決まっているが、珍しい人形つまり目掛として手元に置きたいと思う者はいるだろう。目掛であっても寵愛され大切にされるなら、それも女の幸せのひとつの形ではあった。
御役人の前でこのようなことを広言なさるとは。わたしは父に溺愛されているのだと、あらためて心に沁みる千代だった。
「我が身可愛さのお為ごかしも堂に入ったものだな」
耳の無い筈の赤金が、せせら嗤った。
「その娘が処刑されれば、おまえも女房も連座する。娘が磔なら親は下手人、軽くても山送りは免れまい」
「私どもが死んで娘が助かるなら、親として本望でございます。たとえ身ひとつでも生き永らえてくれるなら……」
「うむ、わしは聾であったな」

寮に隠れている貫目屋の娘が筋彫お蝶であるという投げ文を見て、部下に探らせもせず即刻に出張ってきた赤金は、あわよくばの目論見通りに事が運んで満悦していた。
ここで、二人の会話について、いささかの説明をしておく。
磔も下手人も死刑に違いは無いが、磔とは文字通りに見物人を集めた処刑場で磔に処して幾度も槍を突き刺して絶命させるのに対して、下手人というのは非公開の斬首である。苦痛を感じるにしても一瞬で終わる。死に至る苦しみ方がまったく異なるのだ。
死刑に次ぐ重罰は流刑であるが、この因馬藩では山送り即ち鉱山での強制労働だった。賃銀で雇われた人足と異なり、流刑囚は死ぬまで下山を許されない。一段と軽い刑罰には島流しがあるが、こちらは離島での自給自足だから厳しい生活の中にも日常の平穏がある。女囚だからといって、食物と引き換えの売春を強いられることもなかった。
なお、喜左衛門が「身ひとつでも」と言ったのは、死罪はもちろん流刑や追放刑には闕所すなわち財産没収が伴ったからである。
——手代の与平が赤金の借金証文を持って往復三里を駕籠で駆け戻ったのは、一刻の後だった。喜左衛門自身の手で証文を破らせて、ようやくに赤金は長っ尻を上げた。
「筋彫お蝶を挙げた証しまでは隠すわけにゆかぬが。この娘に腰巻を着けてやれ」
それでも上半身は晒さねばならない。しかも腰巻は、他人に見せるべきでない下着だ。
千代は竹轡を噛まされて抗議の声を封じられている。喜左衛門は何か言いかけたが、諦めてうつむく。この当時、太腿はおろか脹脛を曝すさえ女にとっては羞恥の極みであったが、人前で赤子に乳を哺(ふく)ませるのは、まあまあに平気であった。そうであってみれば喜左衛門も、腰から下を隠してもらえたことで、納得せざるを得なかったのであろう。

千代にとっては、全裸であろうと半裸であろうと、死にもまさる恥辱であることに変わりはない。

「立ちませい」

赤金みずからが縄尻を握り、型通りの言葉を掛けてから、ぐいと引っ張った。千代は逆らうのではなく呆然として、立ち上がれない。首の後ろで交差して縛された手首を小役人がつかんで、ごぼう抜きに立たせる。喜平が駆け寄って、乱れた腰巻の裾を整えてやった。

「お千代。堪えておくれ。今はともかくも、御役人に逆らってはいけません」

父の声を遠くに聞いて、千代は首縄を引かれるままにふらふらと歩き出した。廊下を渡り、トセが下駄を履かせようとするのを小役人に遮られて、裸足で外へ引き出された。

すでに門の前には、黒山の人だかり。半里は離れている村から物見に来た農民が大半だが、近隣の寮で使われている下男下女も混じっている。寮の主、たいがいは高禄武士や商人の目掛だけは見当たらなかった。などと看て取る余裕(ゆとり)は、千代には無かった。

最も羞ずかしい所は腰巻で隠されているとはいえ、腋の下を無防備に曝している。この時代の女たちに（妓も含めて）腋毛を手入れする習わしは無い。子を産んだ女ともなると人前で乳を哺ませるくらいだから、上半身の露出に対する羞恥は薄いが、十九の娘ではそこまで図太くない。

野次馬は半裸の若い娘を目にしてどよめき、その背中に蝶が刻まれているのを見て、口々に

言い交わす。
「筋彫お蝶だ……」
「けど、ここは貫目屋の寮だろ」
「まさか、貫目屋のお嬢じゃあ」
ここは見栄を切る場面とばかりに、赤金が声を張り上げる。
「筋彫お蝶こと、貫目屋喜平が娘、千代。きりきり歩きませい」
首縄を前に引かれて、千代は前へ足を踏み出すしかない。縄尻がぴんと張ると、小役人がすかさず六尺棒で尻を打つ。
「ひいい……」
竹轡の隙間からか細い声が漏れる。悲鳴ではなく、恥辱と嘆きの苦鳴だった。
「与平。おまえは千代に付き添っておくれ。わしは、どうしてもやっておかねばならないことがあります」
捕らわれた娘に付き添うよりも喫緊の重要時とは、菓子折の手配だった。牢屋敷を管轄する城下奉行の三井満足や、赤金から教えられた残谷郷門、そして牢屋敷には、千代が投獄されるまでに手配りを終えておくべきだった。
父が慌ただしく駕籠で走り去って、千代は心細さと同時に惨めな安堵をも覚えた。すくなくとも、お父っつぁんにだけは、羞ずかしい姿を見られずに済む。
これまで、千代は滅多に寮を訪れなかった。寮に匿われてから一月の余は、一歩も門から外へは出ていない。だから、寮から城下までの道筋など覚えていない。しかも、まるきりの濡衣で捕縛され、半裸で引き回されていては。投獄されて詮議に掛けられて、それからどうなるか。

そんな遠い先のことなど思いも及ばない。道筋は見通す限り人に埋め尽くされているように見えた。その中を引き回され、見知らぬ人々に肌を晒す。その気が狂わんばかりの羞恥にすすり泣く千代だった。